

## <書評論文>

# 路上にあらわれたジェンダー格差

Joanne Passaro, *The Unequal Homeless: Men on the Streets, Women in Their Place.* (Routledge, 1996)

丸 山 里 美

### 1 ホームレスへの関心の高まり —— パサロの視座

ここ20年ほどの間に先進諸国の大都市ではホームレスの存在が社会問題となってきている。定まった住居のない貧困者は歴史上いつの時代でも存在していたが、20世紀も終わりに近づいた頃に先進諸国で目につき始めたホームレスは、豊かな社会における絶対的貧困としてとりわけ人目を引く。

アメリカでは1970年代末からホームレスが急増しはじめた。それまではホームレスといえばホボ<sup>(1)</sup>など特定のサブカルチャーを持つ人々やドヤ街に住む日雇労働者を指し、主にアルコール問題を抱えた単身の白人男性で、特定の地区に暮らす「特別な人々」だと考えられてきた。しかし70年代末以降に増加したホームレスは特定の地区を越えて目につくようになり、旧来とは異なり身近にいるような「普通の人々」であると言われている。その証左として70年代末以降のホームレスには男性の単身者だけではなく家族約20%、女性約25%、子ども約15%が含まれていることがしばしば指摘される。また平均年齢は30代で比較的若く、黒人やヒスパニックなど人種的マイノリティが多いことが近年のホームレスの特徴である (Wright 1989=1993; Jencks 1994=1995)。

本書はこうした最近のホームレス問題に焦点を当てた、人類学者でありフェミニストであるJ・パサロによる研究である。彼女は1990年から3年間ニューヨークでフィールドワークを行い、市の運営するシェルターやホームレスの自助グループでボランティアをしたり、会議やデモなどに参加しつつ、1000人以上のホームレスにインタビューを行った。そ

<sup>(1)</sup> ホボヘミアと呼ばれる地域に集住していた浮動的な季節労働者や未熟練労働者、アルコール中毒者や物乞いなどの人々のことで、1920年代前後のアメリカにおいて存在した。

の中であるとき彼女は、なぜホームレスは黒人男性ばかりなのかという疑問にいきあたる。そして一度ホームレスになってしまうとそこから抜け出せなくなる傾向にあるのが、人種的マイノリティの単身男性であるということに気づいた。このように特定の人々においてホームレス生活が永続化するという傾向を説明するためには、従来研究されてきたようにホームレスが貧困などの経済的要因から生み出されていると指摘するだけでは十分ではない。そのジェンダーと人種の偏りについては別の説明が必要であって、それを彼女はジェンダーや家族、人種を取り巻く支配的な文化やモラルのためではないかと考えた。このように従来は経済的問題として語られてきたことをジェンダーや家族の問題として捉え返そうとしたところがパサロの独創的な点であり、本書はホームレス研究にジェンダーによる分析を持ち込んだだけでなく、既存のフェミニズムに対するホームレスの視点からの批判として、多面的に読むことができるだろう。

アメリカと同じように、日本においてもホームレスの問題は、以前は主に寄せ場<sup>(2)</sup>における日雇労働者の問題であると考えられていた。しかし景気が悪化した1992年以降、ホームレスは「普通の人々」にまで広がりつつあり、寄せ場周辺を越えて都市の路上に顕在化しはじめた。現在その数はおよそ3万人、そのうち女性は約3%であると言われている。しかしながら日本のホームレス研究でも、就労形態の変化や失業率の高まりなどの経済的分析が主流で、なぜホームレスが単身男性ばかりなのかについて考察されたことはほとんどなかった。日本のホームレスの場合にも近年は若年化が進み女性も少しずつ増加していて、徐々にアメリカの状況に近づいてきているという印象を受ける。こうした中でパサロのジェンダーに着目する分析は、日本のホームレスを考える際にも参考になる有用な視点を提示しているといえるだろう。

本書は6章構成となっている。導入部に続き2章の「ハウスとホーム」では、先行研究を参照しながらホームレスを分析する際にマクロな経済的要因ではなく人種とジェンダーに着目する本書の基本的な視点が示されている。3章の「パノプティコンの向こうに」では男性ホームレスが一般的な男性性から逸脱した存在であること、4章の「生きるかセックスか」では女性ホームレスが女性役割から逃れられないことが、具体的に人々の語りを引用しながら描かれる。5章の「想像の特権」では空間にジェンダーイデオロギーが刻印されていること、ジェンダーや人種によって取りうる選択肢が違うことが述べられ、その

---

<sup>(2)</sup> 寄せ場とは日雇労働者市場のことで、日々就労先などが変化する短期雇用の労働者をプールするために周辺にはドヤ街が形成されていることが多い。日雇労働という性質上、景気の状態や季節、天候などによって寄せ場で求人される仕事量は増減が激しく、仕事にありつけなかった労働者はホームレス生活をするということが、バブル期でさえも寄せ場では珍しくなかった。現在もホームレスの約3～6割は寄せ場で就労した経験があるという。

後に現時点でホームレスの人々に必要であると思われる政策提言がなされた結論部が続く。以下では本書の概要を紹介しつつ、まず男性ホームレスと女性ホームレスの性役割に対する違いを見ていき、次にホームレスの人々に現れた階級とジェンダーとの交錯に焦点をあてて述べる。最後に本書の意義と問題点を筆者の関心に照らして検討したい。

## 2 男性性からの逸脱、女性性への適応

現在のような豊かな社会において人がホームレスになるのは、怠け者であるなど本人の責任であり自業自得であるとする見方は根強くある。そうしたホームレス個人に責任を帰す見方を批判し、公的な対応と人々の理解が得られるよう、従来の研究ではホームレスを生む原因としてマクロな経済的要因が強調されてきた。しばしば指摘されるのは、経済後退による失業率の増大、とりわけそれが非熟練労働者に顕著に見られること、緊縮財政により貧困者への住宅補助がカットされたこと、ジェントリフィケーションによるドヤや低家賃住宅の減少などである。そして同時にホームレス個人に責任を帰すことになりやすいような文化的説明は慎重に避けられてきた。文化的説明とは、ホームレスとアルコール依存や麻薬依存との因果関係、精神病院の脱施設化によって多くの患者が路上に押し出されたこと、家族の紐帯が弱体化したことなどである。しかしホームレス当人の責任を問うことを避けた結果、従来の研究ではホームレスの人々が単に「犠牲者」としてだけ扱われ、個々人の意識や主体性が失われてしまったとパスロは言う。彼女が出会ったホームレスたちの多くは、一見自業自得だと思われかねないような、自らの意志でホームレス生活を選択したという発言をした。しかしここで問題になっているのはその選択肢なのである。ホームレスの人々に開かれた選択肢は非常に限られているうえ、個々人のジェンダーや人種によって異なっていて、経済的条件に拘束されているだけでなく、男性を労働へ駆り立て、女性を家庭へ押し込めるような家族規範によっても大きな拘束を受けている<sup>(3)</sup>。

パスロはフィールドワークの中で出会った男性／女性ホームレスたちの語りを豊富に散りばめながら、人々を拘束しているジェンダーイデオロギーを丹念に描き出していく。男たちは貧困や肌の色のために一家の稼ぎ手となる機会を奪われたり、その役割を重荷と感じて逃げ出した結果ホームレスになった人々だった。ある男性は、働いて家族を養うこと

<sup>(3)</sup> パスロはホームレス (homeless) とハウスレス (houseless) という言葉を用いて、このことを象徴的に示している。ハウスレスとは家 (house) がない状態のことであり、ホームレスとは家庭 (home) のない状態のことであって、両者は異なる状況を指す。従来のホームレス研究は人が家を失ってハウスレスになる経済的要因の分析に集中していたが、ホームレスとは核家族イデオロギーによって作りだされた文化的な問題であって、家族の概念を用いた分析がなされなければならないと述べている。

ができなかった自らの経験を「男になりたかったけどやり方がわからなかった (I gotta be a man and I don't know how to do it)」と表現する。ここでは家族を養うことと男であることが同義として語られている。「男らしい」ということはしばしば成功と関連づけられ、成功はしばしば金銭によってはかられる。したがって中産階級の男たちだけが、働いて家族を養うというような支配的な男性概念を、自らの権威や特権を正当化する根拠として利用することができたのだと彼女は言う。その出自ゆえに収入を得る機会をもともと制限されている下層階級で人種のマイノリティの男たちは、そうした男性概念にむしろ圧迫されてきた。彼らは家族を養うことのできない自分を「男らしく」ない人間であると思ひ込み、苦しんできたのである。ホームレスの男たちはこのように「男らしく」なれなかった弱い存在である一方で、家族や社会からの拘束を受けていない、危険で暴力的で過剰に男性的な存在だと見られている。その両者の矛盾する状況を男性ホームレスたちは生きているのである。

ホームレスの男性が一般的な男性概念から逸脱した人々だったのとは逆に、ホームレスの女性たちは一般的な女性概念を体現したような、依存的で弱い女だった。パサロが出会った女性たちは、暴力をふるったり近親相姦をする家族から逃げてきたり、死別や離婚などによって配偶者と別れた人々だった。夫の収入に依存して生活していた女性の場合、配偶者を失えば同時に収入の道も断たれることになるため、DV被害に遭っていたとしてもなかなか家を出られないということがしばしばある。夫の暴力から逃れてきてホームレスになったある女性は、ホームレスになったとしても家にいるよりましだと思って家を出てきたと言った。彼女にとっては、突然の襲撃や性暴力などの危険に常にさらされなければならない路上生活の方が、家にいるよりまだ安全だったのである。

路上での生活は常に危険にさらされており、女性にとって非常に過酷である反面、女性や子どもは守られるべきだと一般的に考えられているために、ホームレス女性に対しては男性に比べてさまざまな選択肢が開かれている。インフォーマルには人々の関心が女性ホームレスに集まりやすく、道行く人から援助を与えられる機会が多いことなどがある。フォーマルには男性と比べて女性や子どもには福祉国家による保護が手厚いということがあつた。例えばシングルマザーはAFDC<sup>(4)</sup> (児童扶養家族手当: Aid to Families with Dependent Children) を受給しやすく、またニューヨークだと家族世帯は住宅補助を受けることができる。福祉制度は家族を基本単位としているため、子どもを持つ女性は保護

---

<sup>(4)</sup> AFDCはもともと配偶者と死別した母子を対象とした制度だったが、女性たちのほたらきかけによって、当初伝統的家族の逸脱だと考えられて排除されていた離別母子世帯や未婚の母にも、1960年代からは適用されるようになった。

の対象となりやすいのである。その結果、母性主義的な福祉制度に同調し母親や妻の役割を担って家庭に入ることを受け入れられる女性は、路上生活を免れたり、たとえ一時的にホームレス生活に陥ってもそこから短期間で脱出することができた。

限られた福祉財源の中では、単身の男性は援助には値しないとみなされて長くホームレス状態にとどまり続けなければならない。それに対して女性ホームレスは、一般的には男性に比べて援助が与えられる機会が多いが、ひとたび家庭に入ることや福祉制度の温情主義、母性主義的な福祉制度を拒絶すると、男性同様やはりホームレス生活にとどまり続けなければならない。結局、核家族が単位となっている現在の社会において、ホームレス生活から抜け出るもっとも確実な方法は、パートナーを見つけて子どもを作り家族を持つことなのである。家族を持てば福祉制度の対象者となり、さまざまな援助を受けることができる。しかしホームレスとはもともと家族の問題で、家族が生み出したものだと考えるとすれば、ホームレス生活から抜け出す最良の手段が家族をつくることという現在の状況では、またはじめに逆戻りだとパサロは言う。

### 3 人種、ジェンダーの影の下で

一人世帯が増加するなど家族の形が多様化してきている現在でも、家族神話は依然として健在であり、女性は母性を持つものとして神聖視されている。女性を母性的存在とするような支配的イデオロギーは、人種によるスティグマを覆い隠してしまうほど強い。例えば黒人の女性ホームレスは母親である限りホームレス生活を免れることができる。つまり黒人男性が黒人として扱われるのに対し、黒人女性は女性として扱われるのである。社会福祉においてはこうしたイデオロギーがより明らかな形で現れる<sup>(5)</sup>。女性を庇護される存在とするような社会福祉制度は、例えばAFDCの受給対象者が女性たちのはたらきかけによって死別母子世帯から離別母子世帯や未婚の母にまで拡大されたように、女性自身が過去に勝ちとってきたものだった。しかし同時にこうした制度は女性を伝統的な女性役割や家庭へと押し込めることにもなった。そして女性たちが生きるために選択してきた支配的なジェンダーイデオロギーへの同調は、皮肉なことに女性の役割を押し付ける制度に共謀し、期せずしてそれを補強することになってしまった。そしてそのことが男性、とりわけ

---

<sup>(5)</sup> 社会福祉は、賃労働を担当する男性と、家事・育児・介護を担当し被扶養者である女性という伝統的家族イデオロギーの下に成り立っていると杉本貴代栄は述べている。そのため男性と女性が同じ経済的困窮状態に陥ったときには、男性には労働を可能にするような援助が与えられ、女性には必ずしも労働を期待するのではなく家に留まるための援助が与えられがちであるという（杉本 1997）。

経済的人種的ヒエラルキーの最下層にいる黒人のホームレス男性、さらに福祉制度を拒絶して路上で生きる女性ホームレスたちの存在を切り崩すことになってしまったのだった。

最近のフェミニズムでは、母性主義的な政策が女性を依存的にしているという批判もなされている。こうした見方は正しいが、ホームレスの観点から見ると、たとえ依存的にしているにせよ女性には生きるための選択肢があるが、男性はあらゆる優先順位の中で常に一番下になってしまっているといえる。現在のところフェミニストたちは男性性の分析を男性自身に委ねてきているが、男らしさ／女らしさは関係的なものであるため、いまや女性の視点に立つだけでなく男性も考慮に入れる時期にきていると一部の女性たちは言い始めた。さらに最近のフェミニズムでは、ジェンダーを二元的で固定的なアイデンティティではなく、多様でパフォーマンス的なものと捉えるという傾向がある。確かにこうした見方によってジェンダーの文脈依存性や移ろいやすさをとらえることができるようになったが、ジェンダーが場合に応じて自由に選択できるものではなく、強制されたパフォーマンスだという事実がときに覆い隠されてしまうとパサロは言う。ホームレスという援助に依存した弱い存在には、選択は限られこの強制がはっきりと現れている。

社会にはジェンダー、人種、階級についてのさまざまな価値が存在していて、それによって人々が生きるための選択肢に制限が加えられている。その結果、特定のスティグマを持つ人だけがホームレス生活から抜け出せなくなっているのである。このように支配的イデオロギーに適うか否かが社会的価値の指標となり、その指標によって援助に値する人物か否かが判断されるとき、人々の生きる機会が奪われてしまうことになる。

これまでにこうした差異を解消するために行われてきたのは、人種やジェンダーにもとづくアファーマティブアクション<sup>(6)</sup>だった。そうした政策は確かに一定の成功をおさめてきたが、結果的にそこから利益を得られたのは、女性や人種的マイノリティの中でも中産階級に属する人々だけだった。今新たに求められているのは、社会政策の中でジェンダーや人種に関する言説を避け、階級にもとづくアファーマティブアクションを行うことであるとパサロは言う。これは特定の局面、ある社会的歴史的状況においてのみ有効な過渡的なアプローチに過ぎないが、人類学者も積極的に流動的な現場に関わり、分析だけではなく何らかの提案をする責任があると考えている彼女は、あえてその必要性を主張している<sup>(7)</sup>。たとえ差別をなくすという名の下に行われていても、何らかのアイデンティティに基づいたカテゴリー化は、矛盾を深めてしまうことにもなりうるとパサロは結論づけている。

---

<sup>(6)</sup> 雇用や教育の面で不利な立場に置かれてきた黒人などのマイノリティに対して、不利な状態を改善するためにつくられた数々の政策の総称。

#### 4 カテゴリー化からのさらなる排除——むすびにかえて

本書の意義は、まず何といてもホームレス研究にジェンダーによる分析を持ち込み、従来は経済的問題だと考えられていたことを、ジェンダーや核家族理念による拘束という観点から捉え直したことである。女性ホームレスを焦点化し彼女たちの聞き取りに基づいて行われた研究は本書以外にもいくつか存在しているが、中でもパサロの研究が画期的なのは、女性ホームレスだけではなく男性ホームレスを同時に対象とすることによって、男性と女性を相互に比較しつつ、ホームレスの人々全体に反映されたジェンダーイデオロギーや家族規範について分析し得たという点であろう。フェミニストを自認するパサロは、当初ホームレス女性の問題は男性よりも深刻に違いないと考えていたが、フィールドワークを続けるうちに男性の置かれている状況の深刻さに気づいたと後に述べている(Passaro 1997: 158)。

しかしながら、ホームレスの人々を拘束している人種やジェンダーにもとづく文化的規範の分析という本書のテーマからすれば、貧困者へのアファーマティブアクションが必要であるという結論はあまりに唐突であるように思われる。それはパサロが冒頭でホームレスという存在を経済的側面からのみ捉えることを批判しながら、最終的にホームレスを人種やジェンダーに対立するような「貧困階級」として語ってしまっているということに一因があるだろう。人種、ジェンダーによる政策にかわって階級にもとづく政策を単純に持ち込むだけなら、パサロ自身も指摘しているように、階級というカテゴリー化に足をすくわれてしまいかねない。

さらにホームレスの人々が利用できる制度のうち、実際にどのような人を対象としたどのような制度があるのかについての具体的な言及がほとんどないことが、結果として致命的なミスにつながってしまっているように思われる。例えば唯一具体的に述べられた福祉制度であるAFDCを例にしてパサロが女性には開かれている選択肢が多いと言うとき、女性として想定されているのは子どもがいる女性に限られている。母性主義的な福祉制度の対象外となってしまうような単身女性の存在は見過ごされてしまっているのである。ここでは女性を家庭へ閉じ込めるような母性主義的イデオロギーを利用しながらでもホームレス生活を短期間で抜け出すことのできる女性と、そうしたイデオロギーに同調することを

---

<sup>17)</sup> パサロは階級にもとづくアファーマティブアクションが必要であるという彼女の主張が、人種的マイノリティを排斥し、ジェンダーや人種にもとづくアファーマティブアクションを貧困者へのアファーマティブアクションに転換させようとしている右派の主張と結びつきやすいという危険性に留意しつつも、その必要性をあえて主張している。

拒絶したり、利用できる福祉制度すらなく路上に取り残されてしまっている単身の女性とが、すべて同じ女性ホームレスとして一括りにして語られてしまっている。

パサロが主張したように、人種やジェンダーにもとづくアフーマティブアクションのかわりに貧困者をフォローするような政策を導入するだけでは、このように貧困者の中でもさらに抑圧的な立場に置かれている女性や人種のマイノリティ、とりわけパサロが見過ごしてしまった黒人の単身女性ホームレスたちが、またそこからも取り残されていくのではないだろうか。人種、ジェンダーによる政策にかわって階級にもとづく政策が必要という結論を導く前に検討されるべきだったのは、人種やジェンダーによるカテゴリー化の作用そのものを問い直すということであり、具体的な政策提言を行う必要があるというパサロの立場に則していうなら、人種、ジェンダーによるカテゴリーを排他的にしないようにやり方で、どのようにそれを具体化することができるのかということだろう。ホームレスとは統一的なアイデンティティではなく、さまざまなカテゴリーから排除されてきた人々の総称であるのなら、ホームレスを見ていくときに必要になるのは、さまざまな場所からこぼれ落ちてしまった存在へ絶えず目を向け続けることではないだろうか。

## 参考文献

- 岩田正美, 2000, 『ホームレス／現代社会／福祉国家——「生きていく場所」をめぐって』明石書店。
- Jencks, Christopher, 1994, *The Homeless*, Cambridge: Harvard University Press. (=1995, 岩田正美監訳・大和弘毅訳『ホームレス』図書出版社。)
- Passaro, Joanne, 1997, “You Can't Take the Subway to the Field!": 'Village' 'Epistemologies in the Global Village,” Akhil Gupta and James Ferguson eds., *Anthropological Locations*, California: University of California Press, 147-162.
- 杉本貴代栄, 1997, 『女性化する福祉社会』勁草書房。
- Wilson, William Julius, 1987, *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy*, Chicago: University of Chicago Press. (=1999, 青木秀男監訳・平川茂・牛草英晴訳『アメリカのアンダークラス——本当に不利な立場に置かれた人々』明石書店。)
- Wright, James D., 1989, *Address Unknown: The Tragedy of Homelessness in America*, Hawthorn, N.Y.: Aldine de Gruyter. (=1993, 浜谷喜美子訳『ホームレス——アメリカの影』三一書房。)

(まるやま さとみ・修士課程)